

世界に羽ばたけ！ 米山学友⑩

ウガンダの子どもに笑顔を



国情に翻弄された青春時代

1971年、センパラさんが14歳のときでした。幼少期を隣国ケニアで過ごしウガンダに帰国した直後、クーデターが勃発。権力を握ったイディ・アミン大統領による独裁政治が始まりました。弾圧や粛清、抵抗勢力と見なされれば殺され、多くの人々が国外へ亡命しました。

「国はひどい状態だったけど、おかげで非行に走らずにすんだ」——、高校生になったセンパラさんは赤十字青少年クラブに入部します。ある日、クラブの活動で近くの村へ行き、老女の家の屋根や壁を直してあげたところ、老女は目を潤ませ、わずかな食料からサトウキビと落花生をくれました。このとき彼は「貧しく恵まれない人のために人生をささげよう」と心に誓いました。

78年、圧政に反旗を翻したウガンダ民族解放戦線の反撃が始まると、21歳のセンパラさんは迫撃砲や大砲の爆音が聞こえるなか、ウガンダ赤十字の一員として難民キャンプで救援に当たりました。しかし、そこも政府軍の攻撃を受け、辛くも脱出すると、ほかに選択肢もないまま解放軍に合流。翌年、解放戦線は勝利を収めアミン大統領は追放されましたが、その後も混乱は収まらず、さらに多くの人々が殺され、町が破壊されました。

ウガンダはまた、世界で最初にエイズの感染拡大が起きた国でもあります。一時はHIV／エイズ感染率が32%にまで達し、国家非常事態宣言が出されました。

終わらぬ内戦とエイズ禍——。その最大の犠牲者は子どもたちでした。親を失った子どもは200万人を超え、学校にも行けず、飢えていました。

子どもたちを放っておけない

5年に及ぶ内戦がようやく終結すると、国土は荒廃し、町は焦土と化していました。そんななか、センパラさんは仲間とともにNGO・ウガンダ意識向上財団（CUFI）を結成。社会の再建のため、親を失った子どもに衣食住を提供し、教育を受けさせる活動を始めました。

活動を支える知識の必要性を感じたセンパラさんが来日したのは、94年の冬。発展途上国の農村指導者を育成している栃木県のアジア学院で、有機野菜の栽培や畜産、魚の飼育などを学ぶためでした。

日本で迎えた初めての朝、目の前に広がる景色に思わず、「なんだここは！ 死の土地か？」。木々は茶色の枝を寒風にさらし、枯れ果てたような大地。四季によって植物が姿を変えることを知らなかったセンパラさんには、「本当にここで知識が得られるのか」と不安を抱えての出発でした。しかし、9か月間の研修を終え帰国すると、アジア学院で得た知識は大成功を収めました。特に魚の養殖技術は栄養源としての面だけではなく、学校に通えない子どもたちが、池をつくり、魚を育て、収穫の達成感を味わうことによって、養殖のノウハウと自立への自信を身につけることができたのです。

アフリカ東部、赤道にある国・ウガンダは、世界最貧国の一つ。平均寿命は50歳、人口の約半数は15歳以下の子どもです。1962年の独立以降、民族間の紛争にかかわる絶え間ないクーデターで混乱を極めたウガンダ。米山学友のスチュアート・マクブヤ・センパラさんは、紛争やエイズで親を失った子どもたちの支援活動を行い、自立への道を探りながら、母国の発展のために頑張っています。



こうした取り組みがアジア学院に評価され、2001年、今度は養鶏を専門に、再び日本で学ぶ機会を得ました。センパラさんが米山記念奨学生となったのはこのときです。しかし、各国の学生が共同生活を送る学院では英語しか使われないため、彼もほとんど日本語が話せません。世話クラブである鹿沼ロータリークラブの例会に出席するときには、学院の職員が同行し交流を助けてくれました。言葉の問題から特定の会員との深い交流は生まれませんでした。しかし、「米山記念奨学金がなければ2度目の研修に参加できなかったし、2度目の研修がなければ今の自分はいない。10年近くたった今も、会員たちの温かい笑顔を思い浮かべることができる」と彼は言います。

持続可能な発展を目指して

C U F I では現在、2つの学校の約400人の子どもに毎日学校給食を提供し、養鶏技術を教えています。リーダーであるセンパラさんが、最も頭を悩ませるのは資金の問題。日本からは、千葉県の高校がバザーで得た収入を寄付し、古着や文房具を送るなどの支援を行っています。「できるだけ資金援助に頼らず、自分たちの収入で発展する道を模索していますが、まだまだ厳しい」と話します。

数年前からは村の若者や女性を募って、日本で学んだ「持続可能な有機農業・循環型農業」にも着手しました。家畜の糞を畑に、収穫したトウモロコシを鶏のえさに、

プロフィール

スチュアート・マクブヤ・センパラ さん

(2001 - 02年 / 鹿沼RC)ウガンダ・カンパラ市出身。母国で赤十字の活動にかかわり、1986年、内戦やエイズで親を失った子どもを支援するNGO・ウガンダ意識向上財団(CUFI)を設立。学校給食や有機農業、環境植林などのプロジェクトを推進している。



鶏の卵を人間に、と循環の輪は完成しつつあります。建築用木材として木を育て、環境保護のための植林もしています。現在52歳になった彼には、どうしてもかなえない願いと夢があります。

「先進国の人からみればささやかな願いかもしれませんが、私たちの願いは、すべての子どもたちがお腹いっぱいになって、夜ぐっすり眠れること。夢は、子どもたちのために学校をつくることです」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281
Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

台湾学友会による日本人対象の奨学金がスタート



奨学生の山下さん(左)と阮理事長

台湾米山学友会(阮允恭理事長)の「日本人若手研究者奨学金」は、日本のロータリーへの恩返しとして、台湾の大学・大学院で学ぶ日本の若者に奨学金を支給し、日台の絆を深める人材を育てようとするもの。学友からの寄付をもとに毎月2万5,000台湾ドルを1年間支給するほか、カウンセラー制度も備え、留学生を物心両面で支えます。第1号奨学生に選ばれた山下世莉さんは、9月から国立政治大学大学院に留学。「空港で学友会の方が横断幕で迎えてくださり、緊張が一気に解けました。皆さんが“私たちが家族だと思って”と言ってくださって、これほど心強いことはありません。奨学生になれたおかげで、充実した生活を送っています」と話しています。